

資格英語対応語彙学習教材の分析

—「広大スタンダード語彙リスト6000」について—

山本五郎

広島大学外国語教育研究センター

はじめに

本稿は、英語語彙学習教材として、広島大学外国語教育研究センターで開発された「広大スタンダード語彙リスト6000」に焦点を当て、語彙教材としてのその特性を分析し考察するものである。

1 本稿の目的と学術背景

「広大スタンダード語彙リスト6000（以下、広大スタンダード6000）」は、広島大学の必修英語コースとして提供されているコミュニケーション IB, IIB およびコミュニケーション基礎に向けて、語彙力養成のための教材として開発されたものである。コミュニケーション IB, IIB, 基礎は TOEIC IP テストの受験を組み込んだコースになっており、これらのコースのテスト等で直接的に活用される広大スタンダード6000は資格対応の語彙リストという側面がある。

一般的に、英語資格対応の語彙教材は、学習効率や対象とする英語資格試験の出題傾向を考慮に入れる必要があるため、提示する単語の定義や例文が限定的になるという懸念がある。広大スタンダード6000についても、学習効率や資格試験の内容はもちろん使用テキスト¹⁾や授業内で実施するテスト、またオンライン学習システムとの連携などの制限のため、掲載されている各単語の定義は最小限に抑えられている。

一方で、広島大学での英語教育はリーディングとリスニングにあわせて、スピーキングやライティングといった TOEIC の問題形式では問われない技能を含めた英語力の養成を目指しているため、語彙力養成のための中核的な教材として開発された広大スタンダード6000は、単なる資格対策のみを目的としたものではなく、全般的な英語力向上のための教材であるという点が見落とされてはならない。

一般目的の英語 (English for General Purposes) の語彙力を養成する役割がある以上、資格試験対策の観点だけではなく、英語運用面からもその語彙リストの有効性や特性は考察されるべきであり、本稿ではこの点に焦点を当てて分析を行う。

英語学習者向けの語彙リストについての先行研究としては、2000語の見出し語とそれに属する語群からなる General Service List (GSL) (West, 1953) や、GSL に含まれていない一般語彙に焦点を当て使用頻度によってレベルに分けて提示した University Word List (UWL) (Xue and Nation, 1984)、また570語の見出し語とそれに属する語群からなる Academic Word List (AWL) (Coxhead, 1998) などがある。また、それぞれの語彙リストについて分析を行った研究としては、GSL を対象にした Engels (1968) や Richards (1974)、UWL の有効性を検証した Nation (1990)、AWL を基に語彙リストを発展させた Coxhead (2000) などがある。しかしながら、これらの先行研究では、任意のデータベースにおける見出し語の出現頻度や特定のテキストについて語彙リストの単語がどれだけカバーしているかという点に基づいてその有効性が論じられており、各単語の定義の妥当性については十分な研究が行われているとは言えない。単語の出現頻度による検

証だけでは、語彙リストに掲載されている単語が様々なテキストの中でどのような意味で使われているのか明らかにできない制限があることはCoxhead (2000)でも指摘されており、精度の高い語彙リストの分析を行うには個別の単語の意味に焦点を置き、その使われ方を見ることが必要である。これらの点を踏まえ、本稿では特にオーラルコミュニケーションの視点から、広大スタンダード6000で学習対象とされている語彙の定義について分析しその課題について考察する。

2 掲載定義数の検証

本稿では、まず広大スタンダード6000で学習対象となっている語彙の定義と英和・英英辞典²⁾に掲載されている定義数を比較することで、語彙リストの定義数が限定的になっていることを確認した。

検証にあたっては、語彙リストに掲載される見出し語の中から、名詞、動詞、形容詞、副詞の各品詞についてそれぞれ無作為に100語抽出した。この品詞グループをもとに、各見出し語について、英和、英英辞書に掲載されている定義数と学習用語彙リストに掲載されている定義数を検証し、その平均定義数の差を示したのが表1である。

表1. 学習用語彙リストと辞書の掲載定義数の比較

	スタンダード6000	英和・英英辞書 (平均)
動 詞	1.2	4.6
名 詞	1.2	3.9
形容詞	1.1	2.7
副 詞	1.0	1.7

語彙学習教材では掲載定義を1つに絞ったものが大半である一方、辞書ではほとんどの見出し語について複数の定義が掲載されていることが分かる。特に動詞と名詞においては見出し語に対して定義が一つのみという例は稀である。定義数の差は動詞で最も顕著であり、以下名詞、形容詞、副詞と続く。

辞書に掲載されている定義には実用頻度の低い意味も含まれており、そのすべてを漏らさず学習者に提示する必要性は低いと言える。このため、表1で示された掲載定義数の乖離幅が語彙学習教材の妥当性に直接影響するということは断定できない。しかしながら、その幅が大きいほど、限定された定義数では単語の意味を十分提示できないリスクが増加する危険性があるということは言える。本節では語彙リストの定義数が限定的なものであることを確認したが、次節ではこれを前提に個別の単語の意味に注目してより詳しい検証を行う。

3 分析と考察

上記した各品詞グループの単語が実際の運用上どのような意味で使用されているのかを確認し、掲載定義の妥当性について考察するために、以下では各品詞グループの中から定義数の差が大きいものを10単語ずつ抜き出した。これらの単語群について、表1と同様にスタンダード6000と辞書の定義数差を確認するとともに、広大スタンダード6000で採用されている意味がオーラルコミュニケーションでの使用例をどれだけカバーするのかという点についてを映画英語コーパス³⁾を用いて検証しまとめたのが表2～5である。

表2. 語彙リストの掲載定義数とコーパスカバー率 —動詞—

	動 詞	語彙リスト定義数	辞書定義数平均	定義数差	コーパスカバー率
1	dip (30)	1	9.0	8.0	30.0
2	divide (29)	1	8.5	7.5	48.2
3	explode (49)	1	6.5	5.5	57.1
4	express (66)	1	6.5	5.5	50.0
5	force (486)	1	8.0	7.0	24.5
6	lodge (11)	1	7.0	6.0	0.0
7	raise (249)	2	18.5	16.5	24.5
8	reduce (24)	1	9.5	8.5	83.3
9	reverse (44)	1	7.0	6.0	34.1
10	treat (252)	1	6.5	5.5	62.3

表3. 語彙リストの掲載定義数とコーパスカバー率 —名詞—

	名 詞				
1	crown (49)	1	14.5	13.5	55.1
2	master (378)	1	12.5	11.5	1.9
3	iron (72)	1	9.0	8.0	34.7
4	package (93)	1	8.0	7.0	76.3
5	presentation (19)	1	7.5	6.5	94.7
6	background (64)	1	7.0	6.0	46.9
7	reference (36)	1	7.0	6.0	63.9
8	staff (109)	1	6.5	5.5	78.0
9	rubber (30)	1	6.5	5.5	96.7
10	toe (98)	1	10.0	5.0	66.3

表4. 語彙リストの掲載定義数とコーパスカバー率 —形容詞—

	形容詞				
1	plain (37)	1	9.0	8.0	16.8
2	odd (76)	1	8.0	7.0	86.8
3	practical (16)	1	7.0	6.0	25.0
4	responsible (176)	1	6.5	5.5	96.0
5	alien (26)	1	5.5	4.5	7.7
6	conscious (21)	1	5.5	4.5	14.3
7	frozen (47)	1	5.5	4.5	85.1
8	dependent (2)	1	5.0	4.0	100.0
9	official (76)	1	4.5	3.5	72.4
10	primary (67)	2	4.5	2.5	88.1

表5. 語彙リストの掲載定義数とコーパスカバー率 —副詞—

	副 詞	語彙リスト定義数	辞書定義数平均	定義数差	コーパスカバー率
1	absolutely (341)	1	6.0	5.0	26.9
2	directly (97)	1	5.5	4.5	76.3
3	lightly (15)	1	5.5	4.5	26.7
4	barely (118)	1	4.5	3.5	89.9
5	personally (123)	1	4.5	3.5	78.9
6	positively (16)	1	4.0	3.0	81.2
7	broadly (1)	1	3.5	2.5	0.0
8	narrowly (0)	1	3.5	2.5	—
9	properly (48)	1	3.5	2.5	93.8
10	specifically (24)	1	3.5	2.5	45.8

(カッコ内の数字はコーパス内における単語の出現数。名詞については、単・複数形、動詞については、主語の人称や時制等による活用形を含む。また、カバー率の算出には、英和辞書の定義のみを利用した。)

広大スタンダード6000に掲載された定義のコーパスカバー率を品詞別にみると、動詞約3割に対してその他の品詞は6割前後となっており、一見すると特に動詞において複数の定義を提示することの重要性を示すものであるように見える。しかしながら、各単語に目をむけると、必ずしも各品詞グループ内で一定のカバー率が保たれているわけではないことがわかる。

例えば、動詞については大半が5割を切るカバー率になっているものの、reduce (表2)のように8割以上が語彙リストの意味として使用されているものもある。また、動詞以外の名詞、形容詞、副詞グループにおいても、過半数の単語が5割以上のカバー率であるものの、名詞のmasterや形容詞のalien⁴⁾のようにカバー率が1割に満たない単語も認められる。この点を踏まえると、掲載単語の品詞のみに頼って学習語彙リストに複数の定義を掲載することの必要性について論じることはできないことがわかる。

また逆に、語彙リストと辞書の定義数差が大きい場合でも、rubber (表3)やdependent (表4)のように単一の定義でカバー率が9割を超えるような単語もあり、単語によっては必ずしも複数の定義を載せる必要はないこともわかる。

上記したように、表2～5は、語彙リストとしてより効果的に定義を提示するためには、学習対象とするそれぞれの単語について、定義の精査及び選定が必要であることを示唆していると言える。本節では以下に映画英語コーパスから会話での運用例を挙げ、学習用語彙リストの課題についてまとめた。

3-1 異なる品詞の意味

今回映画英語コーパスで検証した語彙群では、動詞、名詞、形容詞のほとんどの単語について、語彙リストで掲載されている意味とは異なる品詞で使用されている例が多く見つかった。最も顕著な例を挙げると、語彙リストでは動詞として掲載されているforce (表2)について、コーパスでの該当データ486例中348例(71.6%)が動詞ではなく、以下の(1)のように名詞として用いられていることが確認された。

- (1) a. 「(作業) 集団, チーム」

“It was a joint task force, both companies”. (Mr. and Mrs. Smith 2005)

- b. 「力」

“Like the demonic force you believe possessed Emily?” (The Exorcism of Emily Rose, 2005)

形容詞として掲載されている official (表4) においては、形容詞として確認された65例の内55例は語彙リストで採用されている「公式の」という意味で使われており、定義カバー率は8割を超えることになる。しかしながら以下の(2)のように名詞としての用例も11例確認されており、異なる品詞の使用例があるため結果的にカバー率が下がっていることが分かる。

- (2) 「役人」

“You’re in violation of federal code, attempting to bribe a government official”.

(Runaway Jury, 2003)

一つの見出し語について異なる品詞の意味を複数掲載することになると、小テストやオンライン学習での運用にも波及するため、短絡的に品詞項目を増やせばいいというものではないが、学習用語彙リスト構築の一つの課題として注意が必要な点ではある。

3-2 オーラルコミュニケーションでの使用例

表1で確認したように定義数差が小さく、また異なる品詞として使われているケースが認められなかった副詞の語群に関しても、オーラルコミュニケーションの視点から見るとその意味の提示には注意が必要である。例えば absolutely (表5) という単語を見ると、語彙リストの定義である「完全に」という意味で使われているものは341例中92例でありカバー率は26.9%にとどまっていることが分かった。最頻出の意味は、149例(43.7%)を占める「(返事として) そうだとも」の意味であり、オーラルコミュニケーションでの実用性を考えるとこのような意味と用法は何らかの形で学習者に提供されるべきであろう。

- (3) 「そうだとも」

“I think my involvement in this should stay among the three of us”.

“Of course”.

“Absolutely”. (Ocean’s Twelve, 2004)

3-3 上級学習者向け定義の扱い

使用頻度の低い意味についても一定の配慮が必要である。例えば、広大スタンダード6000では「泊める」という他動詞として掲載されている lodge (表2) という単語について、最も使用頻度の高い意味は12例中6例認められた名詞の「小屋, 宿泊施設」であった。日本語で用いられる「ロッジ」が「山荘, 宿泊施設」のような意味で使われるため、学習者にとってその意味は推測可能であると想定し、より使用頻度の低い動詞としての意味に焦点を当てて学習者に提示することは語彙学習上意味があると言える。

今回用いたデータベースでは lodge について「泊める」という意味で使用されている例は認められなかったものの、動詞として使用されている例は複数観察された。コーパスでの使用例を見ると、(4)に示したように、「弾丸・矢などをうち込む」、「抗議を申し立てる」、「ひっかかる」など様々な意味で用いられていることが確認された。

- (4) a. 「(It は銃弾を指し, それが) 撃ち込まれている」
 “It is lodged in the fecal tissues”. (The Affair of the Necklace, 2001)
- b. 「抗議を申し立てる」
 “I am lodging a formal complaint against you with the Department of Defense”.
 (The Core, 2003)
- c. 「ひっかかる」
 “Watch out for those avocados. The pit could become lodged in our throats”.
 (Lemony Snicket’s A Series of Unfortunate Events, 2004)

ここで取り上げた lodge のように名詞としての使用頻度が高い単語が動詞としても複数の意味を持つ場合には、対象とする学習者の語彙レベルや到達目標を考慮した上で優先順位を見極める必要があると言える。頻度の高い意味と低い意味を混在させて提示すると学習効率を下げることになりかねないため、頻度の低い意味については別途上級学習者向けの語彙リストを作成することも一案であろう。

4 まとめ

本稿では、語彙学習用教材である「広大スタンダード語彙リスト6000」について、その掲載定義に着目し、映画英語コーパスを用いた分析を行った。辞書で認められる定義と語彙リストの定義を比較し、特に定義数の乖離幅が大きな単語群について、オーラルコミュニケーションで使用されている意味を確認しながら掲載定義の妥当性について検証を行った。その結果、「広大スタンダード6000」の課題として、掲載単語の多義性を反映させることの重要性が認められた。

広大スタンダード6000については、学習対象とする単語の一部入れ替えや、各単語についての例文の拡充とそれに伴うオンライン教材との連携などの開発が継続中であり、今後より学習効果の高い語彙リストとなることが期待される。本稿がその一助となれば幸いである。

注

- 1) ここでの使用テキストとは、コミュニケーション IB, IIB で採用されている Power-Up Practice for the TOEIC Test Revised Edition (2008, 英宝社) を指す。
- 2) 英英辞書として Oxford ADVANCED LEARNER’S Dictionary Seventh Edition, 英和辞書には「ジーニアス英和大辞典」をそれぞれ用いた。
- 3) オーラルコミュニケーションのデータベースとして本稿で使用した映画英語コーパスは、映画英語教育学会関西支部データベース委員によって作成された「映画英語字幕データベース Ver.3.0 (978本約801万語)」の中から2000年以降に公開された映画データ (406本) を選出したものである。
- 4) 映画英語のみを含む会話英語データベースでは、alien は、「地球外の」「地球外生物」という意味で使われているケースが大半を占めた。これは、SF 映画の題材として「地球外生物」がよく取り上げられることが影響していると考えられる。映画英語以外のデータベースを含めた分析では異なるカバー率になることも予想されるため、より広範囲な分野のデータベースを用いた分析が今後の研究課題の一つであるといえる。

参考文献

- Coxhead, A. J. (1998). *An Academic Word List*. English Language Institute Occasional Publication Number 18. Wellington, New Zealand: Victoria University of Wellington
- Coxhead, A. (2000). A new academic word list, *TESOL Quarterly*, 34-2, 213-238.
- Engels, L. K. (1968). The fallacy of word counts, *International Review of Applied Linguistics*, 6, 213-231.
- Nation, I. S. P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Boston, Massachusetts, Heinle & Heinle pub.
- Richards, J. (1974). Word lists: problems and prospects. *RELC Journal*, 5-2, 69-84.
- West, M. (1953). *A general service list of English words*. London: Longman, Green.
- Xue, G. and Nation, I. S. P. (1984). A university word list. *Language Learning and Communication*, 3, 215-229.

ABSTRACT

An Analysis of the Hiroshima University Standard 6000 Vocabulary List

Goro YAMAMOTO

Institute for Foreign Language Research and Education
Hiroshima University

This paper, an analysis of the Hiroshima University Standard 6000 vocabulary list, focuses on the validity of the Japanese definitions presented in the list. Generally, a vocabulary list for English learners simplifies definitions for each word entry to promote learning efficiency. Hiroshima University Standard 6000, developed by the Institute for Foreign Language Research and Education at Hiroshima University, also presents a limited number of definitions for each entry partly due to the practical features of the list, that it has been designed to collaborate with other available materials, such as online English learning programs and vocabulary quizzes provided in English courses at Hiroshima University.

Based on an analysis of the vocabulary list using an English movie corpus, the paper discusses some aspects to be considered in the future development of the vocabulary list. Such aspects include definitions for various parts of speech, the particular usage and meaning of a word in oral communication, and definitions for advanced learners. Along with the discussion, example sentences from a number of English films are presented, particularly for such words as *force*, *official*, *absolutely*, and *lodge*, to illustrate the above-mentioned aspects properly.

In its approach, this study overcomes the limitations of previous studies on the development of vocabulary lists, such as the General Service List (West, 1953), the University Word List (Xue and Nation, 1984), and the Academic Word List (Coxhead, 2000), in which the various meanings and usages of each entry word have not been thoroughly enough considered.